

# 友人との相互作用による環境配慮行動の伝播

## — ペア・データによる調査 —

安藤香織<sup>1</sup>・大沼進<sup>2</sup>・安達菜穂子<sup>3</sup>・柿本敏克<sup>4</sup>・加藤潤三<sup>5</sup>

<sup>1)</sup>奈良女子大学 <sup>2)</sup>北海道大学 <sup>3)</sup>大阪市立大学 <sup>4)</sup>群馬大学 <sup>5)</sup>琉球大学



### 目的

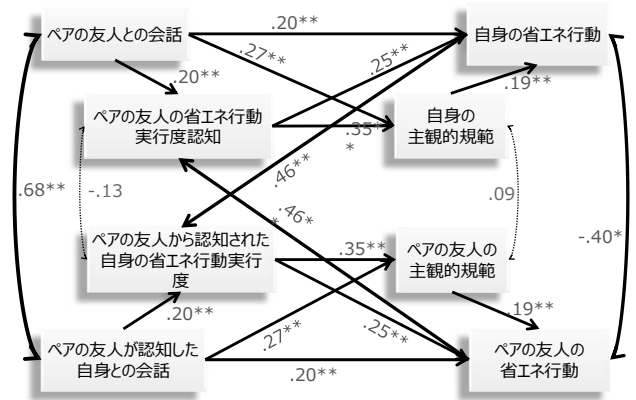
- ◆本研究では、身近な他者との相互作用により環境配慮行動が促進されるプロセスについて明らかにするため、ペア・データによる調査を実施する。
  1. 大学生を対象とし、友人間においても相手の行動の観察が環境配慮行動の伝播に影響を及ぼすのか、そのプロセスを検討する。
  2. 回答者とその親しい友人の回答をペア・データとして分析し、二者間での環境配慮行動に関するコミュニケーション、行動の観察が環境配慮行動の実行度に及ぼす影響を検討する。
- ◆これまで小学生と親を対象とした調査においては、親の環境配慮行動の実行度が子どもの環境配慮行動に影響を及ぼしており、行動の観察が環境配慮行動の伝播に重要な役割を果たすことが示されている (Ando et al., 2015)。
- ◆二者間の相互作用の分析にはAPIM (Actor - partner interdependence model) を用いる(Kenny, 1996)。

### 考察

- ◆友人の行動、実行度認知の影響  
実際の自身の行動とペアの友人の行動の間には関連が見られない、あるいは逆の関連であったが、ペアの友人の実行度認知と自身の行動の間には関連が見られた。  
→回答者にとっての認知的世界において親しい友人が省エネ行動や市民活動を実施していると考えられるほど、自分もその行動を実際に行う場合が多かった。
- ◆ペアの友人との会話  
直接の行動への影響と共に実行度認知、主観的規範を介した間接的な影響が見られ、会話が多いほどその友人も環境配慮行動を実施している、また友人から環境配慮行動を取ることを期待されているとの認知に結びつくことが示された。  
= 友人同士での行動の観察、及び会話が環境配慮行動を伝播すること、実際の行動よりも認知された行動の方が影響が強いことが示された。

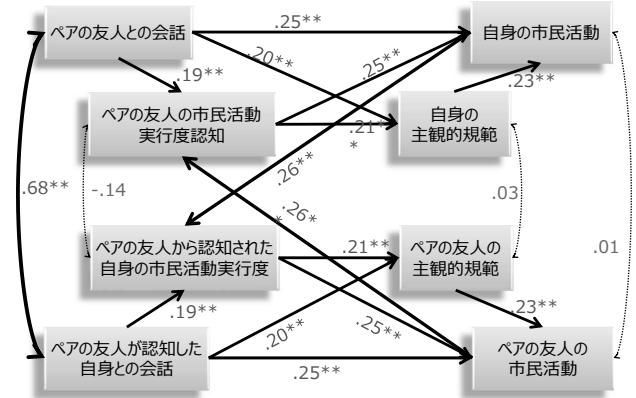
### 方法

- ◆調査期間  
2014年5月～6月
- ◆調査手続き  
国内の4つの大学において調査を実施した。授業時に学生に2組の質問紙を渡し、1組は親しい友人に渡して回答してもらうよう依頼した。回答後は2人の回答を1つの封筒に入れてもらい、大学において回収した。2人の回答をペア・データとして、以降の分析に用いる。
- ◆回答数  
合計回答数：128組 有効回答数：123組(246名) …有効回答率49.4%
- ◆回答者の属性  
男性：141名、女性：104名、不明：1名  
平均年齢：自分=20.2歳、ペアの友人=20.3歳
- ◆質問項目
  - ① 環境配慮行動の実行度  
省エネ：冷暖房を効き過ぎないようにする、市民活動：地域の環境保全を目的とする活動に参加する(リサイクル、地域防災、美化、交通問題など) 5件法
  - ② ペアの友人の実行度認知  
自身の実行度と同様の内容について、友人がどの程度行うと思うか5件法で尋ねた。
  - ③ ペアの友人との会話  
効果的に省エネする方法について、など6項目についてペアの友人と話す程度について5件法で尋ねた。
  - ④ 主観的規範  
私の家族から、私が冷暖房を効き過ぎないようにすることを期待されている、など2項目5件法
- ◆分析手続き  
清水・村山・大坊(2006)の統計ソフトHADを用いてAPIMの検討を行った。



$X^2=168.44(df=34, N=105), p < .001, CFI=1.000, RMSEA= .028$

図2 省エネ行動のAPIM結果



$X^2=124.39(df=34, N=104), p < .001, CFI=1.000, RMSEA= .024$

図3 市民活動のAPIM結果

### 結果

表1 ペアの友人との関係

	度数	%
大学のクラスメート	95	39.3
大学のサークル、部活での友人	62	25.6
高校時代の友人	37	15.3
実家、下宿近くの友人	17	7.0
バイトなど学外の活動での友人	13	5.4
その他	18	7.4

表2 ペアの友人と会う頻度

	度数	%
ほぼ毎日	80	32.8
1週間に2,3回以上	85	34.8
1週間に1回程度	48	19.7
1ヶ月に1回以上	16	6.6
1ヶ月に1回未満	15	6.1

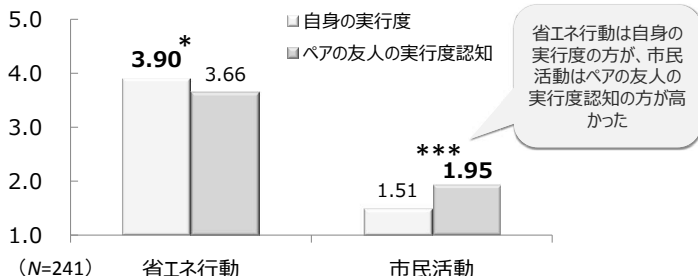


図1 各変数の平均値

表3 相関分析表

	省エネ行動	市民活動
ペアの友人の実行度と自身の実行度の相関	-.125	.230**

注: \*\* $p < .01$  (N = 123)

ペアの友人の実行度と自身の実行度の相関は、市民活動においてのみ有意だった

### 引用文献

- Ando, K., Yorifuji, K., Ohnuma, S., Matthies, E. & Kanbara, A. (2015) Transmitting proenvironmental behaviors to the next generation: A Comparison between Germany and Japan. *AJSP*, 18, 134-144.
- Kenny, D.A. (1996) Models of non-independence in dyadic research. *J of Social and Personal Relationships*, 13, 279-294.
- 清水裕士・村山綾・大坊都夫 (2006) 集団コミュニケーションにおける相互依存性の分析 (1) コミュニケーションデータへの階層的データ分析の適用 電子情報通信学会技術研究報告, 106(146), 1-6.

\*本研究は文部科学省科学研究費(若手B 23700859)による助成を受けた